佐久市埋蔵文化財調査報告書　第158集

岩村田遺跡群　北一本柳遺跡Ⅳ

長野県佐久市岩村田北一本柳遺跡Ⅳ発掘調査報告書

2008．3

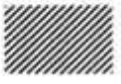
ミヤモリ不動産株式会社
佐久市教育委員会

例　言

1　本書はミヤモリ不動産株式会社による宅地造成事業に伴う岩村田遺跡群　北一本柳遺跡Ⅳの発掘調査報告書である。
2　事業主体者　佐久市岩村田751　ミヤモリ不動産株式会社
3　調査主体者　佐久市中込3056　佐久市教育委員会　教育長　木内　清
4　遺　跡　名　岩村田遺跡群　北一本柳遺跡Ⅳ
5　所　在　地　佐久市岩村田字北一本柳2007-1、2008-1、2008-2
6　調査担当者　出澤　力
7　本書の執筆・編集は出澤が行った。
8　本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。
今回、事業主体者であるミヤモリ不動産株式会社様をはじめ多くの方々のご理解、ご協力を得て発掘調査を行うことができました。この場を持って御礼申し上げます。

凡　例

1　遺構の略称は「M」が溝状遺構、「P」はピットをそれぞれ表している。
2　スクリーントーンの表示は以下の通りである。


地山断面

赤色塗彩

3　挿図の縮尺は遺構は1/80、遺物については1/4としている。縮尺の異なる挿図については図注に明記してある。
4　遺物の写真番号と実測図番号は一致する。
5　遺構の標高は各遺構ごとに統一し、水糸標高を標高として示している。
6　調査グリッドは小グリッド4×4m、大グリッド40×40mである。

目　次

例言・凡例・目次

第Ⅰ章　発掘調査の経緯 …… 1
1. 立地と経過 …… 1
2. 調査体制 …… 2
3. 遺構と遺物の詳細 …… 2
4. 基本層序 …… 2

第Ⅱ章　遺構と遺物 …… 2
1. 溝状遺構 …… 2
2. ピット …… 5
3. 出土遺物 …… 6

写真図版

抄録

第1図　北一本柳遺跡Ⅳ　位置図（1：50,000）

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

1. 立地と経過

北一本柳遺跡Ⅳは佐久市岩村田に所在する。遺跡は佐久市岩村田の市街地西側、東西に流れる湯川の河岸段丘の北岸に位置し、標高 695 m内外を測る。北側段丘は遺跡南側が自然堤防状にやや高く、北側になるにつれ低地状に落ち込んでいる。遺跡はその微高地から低地へと落ち込んでいく縁辺部分に立地している。

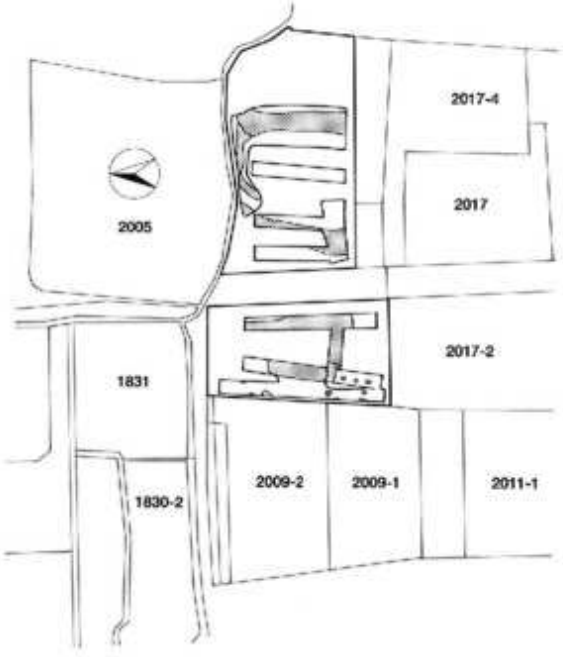
遺跡周辺は、佐久地域でも遺跡の密集する地域として知られており、特に遺跡から南西側にかけての地域では弥生時代から平安時代を主とする遺構・遺物が多数発見されている。

周辺ではこれまで昭和 43 年に宅地造成に伴う東一本柳遺跡の調査が行われており、古墳時代後期の住居址5軒を確認した。昭和 46 年には杏葉・辻金具・鉄製轡などの馬具、玉類といった多様な副葬品が発見された東一本柳古墳の発掘調査が行われている。

また平成以降、新幹線駅周辺の開発、国道 141 号線バイパスの開通などにより遺跡周辺は開発が進み、それに伴う発掘調査が多く行われている。西一本柳遺跡は、道路建設や店舗、集合住宅棟の建設やグラウンド整備などに先立ち平成 3 年以降、平成 19 年現在までで第 14 次までの調査が行われており、弥生から平安時代にかけての住居址を多く認めている。特にグラウンド整備に伴い調査された北一本柳遺跡Ⅰでは弥生時代の人面付土器が出土した。今回調査された北一本柳遺跡では昭和 47 年に弥生時代後期の住居址 7 軒、平安時代住居址 10 軒などを調査した北一本柳遺跡Ⅰをはじめ、平成 15 年には弥生時代の銅釧（青銅製の腕輪）が出土した北一本柳遺跡Ⅱの発掘調査が行われている。また平成 16 年には昭和 47 年の北一本柳遺跡の範囲を含む北一本柳遺跡Ⅲの調査も行われている。この濃密な遺跡分布の状況から、周辺は特に弥生時代中期ー後期、古墳時代における佐久地方の中核的な遺跡であると言える。

今回、対象地において宅地造成が行われることとなり、遺跡の有無を確認するために試掘調査が実施された。結果、弥生時代の住居址、溝状遺構などの遺構が確認されたことから開発主体者と保護協議が行われ、対象地内に置いて遺跡の破壊が懸念される擁壁設置予定部分と地盤改良が遺構確認面まで達する一部分、また道路部分において遺跡の記録保存を目的とした発掘調査が行われることとなった。

第２図　北一本柳遺跡Ⅳ　周辺遺跡図（1：10,000）



第３図　北一本柳遺跡Ⅳ　試掘トレンチ配置図

2．調査体制

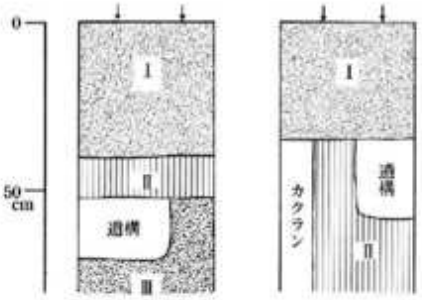
調査受託者	佐久市教育委員会	教育長　木内　清
事務局	社会教育部長	柳沢　義春　社会教育次長　山崎　明敏
	文化財課長	中山　悟（4月～6月）森角　吉晴（7月～）
	文化財保護係長	高柳　正人
	文化財調査係長	三石　宗一
	文化財保護係	荻原　留美　高橋　浩一
	文化財調査係	並木　節子（10月～）　林　幸彦　須藤　隆司　小林　眞寿 羽毛田卓也　冨沢　一明　神津　格　上原　学　出澤　力
	調査主任	佐々木宗昭　森泉かよ子
	調査副主任	堺　益子
	調査担当者	出澤　力
	調査員	浅沼　勝男　阿部　和人　安藤　孝司　市川　光吉　岩崎　重子 江原　富子　小幡　弘子　柏木　義雄　里見　理生　土屋　武士 細萱ミスズ　本田　慶二　柳沢　武　横尾　敏雄　吉田　信行 依田　三男　依田　美穂

3．遺構と遺物の詳細

遺　構・溝状遺構３条（弥生時代）・ピット８基（時期不明）
遺　物・弥生土器（壺・甕・鉢・高坏・器台）・土製品（紡錘車）

4．基本層所

対象地は道路を挟んで西と東二つの調査区に分かれるが東側については後世の攪乱がひどく、深い部分では１ｍ以上の深さまで達する。模式図に表したのは比較的攪乱の深度が浅い調査区東端部の状況である。遺構確認面はローム上のシルト層（Ⅱ層）である。西側の調査区は耕作土（Ⅰ層）下に漸移層（Ⅱ層）がありその下のローム層（Ⅲ層）が構確認面である。(模式図右：東側調査区・左：西側調査区)



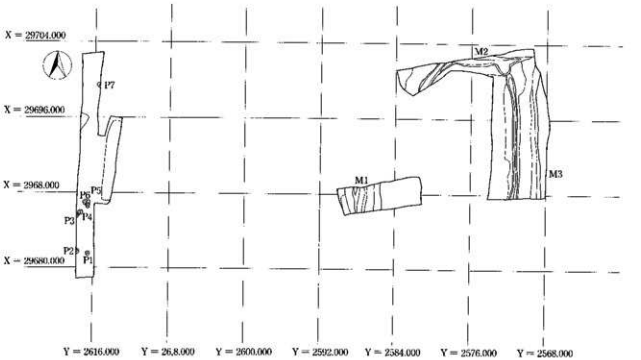
第４図　基本層序模式図

第Ⅱ章　遺構と遺物

1．溝状遺構

・Ｍ１号溝状遺構

遺構は調査区東側の中央で南北方向に走る形で確認されている。対象地は上層の表土が約 100 cm前後の深さで削平された後に土が入る。溝状遺構の形状は中央に漏斗状の落ち込みを認めるもので、規模は遺構確認面での幅が 3.8 ｍ内外、そこから一旦落ち込んでテラス状になる部分の幅 2.3 ｍ内外、中央部の漏斗状の



第５図　北一本柳遺跡Ⅳ　全体図（1：400）

落ち込み部分の幅 1.5 m内外を測る。溝の深さは東端からで最大 68 ㎝、中央の落ち込みの深さはテラス部分からで最大 40 ㎝を測った。試掘等によりこの溝状遺構はほぼ真北から緩やかにＮ－８°－Ｅの方角に弧を描いて伸びてゆくことが確認されている。

また、遺構覆土中からは大量の遺物が発見された。遺物は弥生時代後期の土器であり、壺・甕・鉢・高坏・蓋等が出土し、図化できた 13 点についての詳細は次項に示した。遺物はセクション図において２層と示した黒褐色土層中よりそのほとんどが出土しており、土器等に摩耗も認められないことから一括廃棄されたものである可能性が高い。

本遺跡周辺には弥生時代後期の集落が存在し、近隣で行われた調査では集落を巡る環濠と思われる溝状遺構が確認されている。本遺構の形状はそれらと類似しており、同様に環濠である可能性が考えられる。

・Ｍ２号溝状遺構

遺構は調査区東側北東部で確認された。蛇行しながら東西に走り、西側は後世の表土削平により姿を失い、東側でＭ３号溝状遺構にＴ字状に接近した後に消えてしまう。幅は確認面で約 90 ㎝内外、深さは最大で 30 ㎝を測る。

遺物は覆土中より弥生時代後期の土器を多く確認した。器種は甕・壺・鉢などでありそのほかに完形の土製紡錘車が出土している。遺物のほとんどはＭ３号溝状遺構と接する部分での出土であり、そこで確認された遺物は一括廃棄された遺物である可能性は高い。

本遺構はその蛇行する形状などから人為的なものではなく自然流路である可能性がある。しかし、Ｍ３号溝状遺構との接点部分の大きく広がった形状など、Ｍ３号溝状遺構とともに水場などとして当時の人々に利用されていた可能性が考えられる。

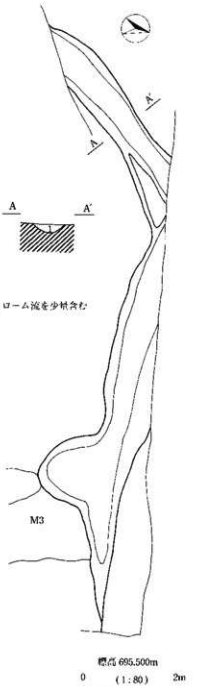
・M３号溝状遺構

遺構は調査区東端で確認された。ほぼ南北方向に縦走し、北端でM２号溝状遺構に接して姿をなくす。著しく攪乱を受けており中央の細い掘り込み部分より上方については破壊されかつての姿を失っている可能性が高い。中央に向かい緩やかに落ち込んでゆく東側の傾斜は確認できるが、これについても後世の掘削の結果である可能性がある。M２との接点部分のやや広がった形状の部分は比較的攪乱を免れている。

出土遺物については壺・甕・鉢などを認め、その出土のほとんどはM２との接点部分において確認された。図化できた４点についてもそこでの出土であり、M２との出土破片と接合できた土器もある。土器の詳細については次項を参照されたい。

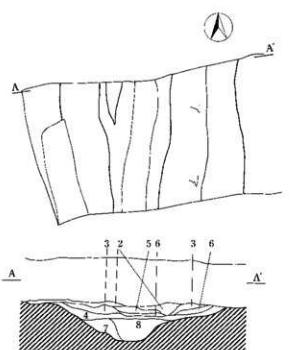
前述の通り、この溝状遺構はM２号溝状遺構とともに、水場的な利用が行われていた可能性が考えられる。

M２号溝状遺構



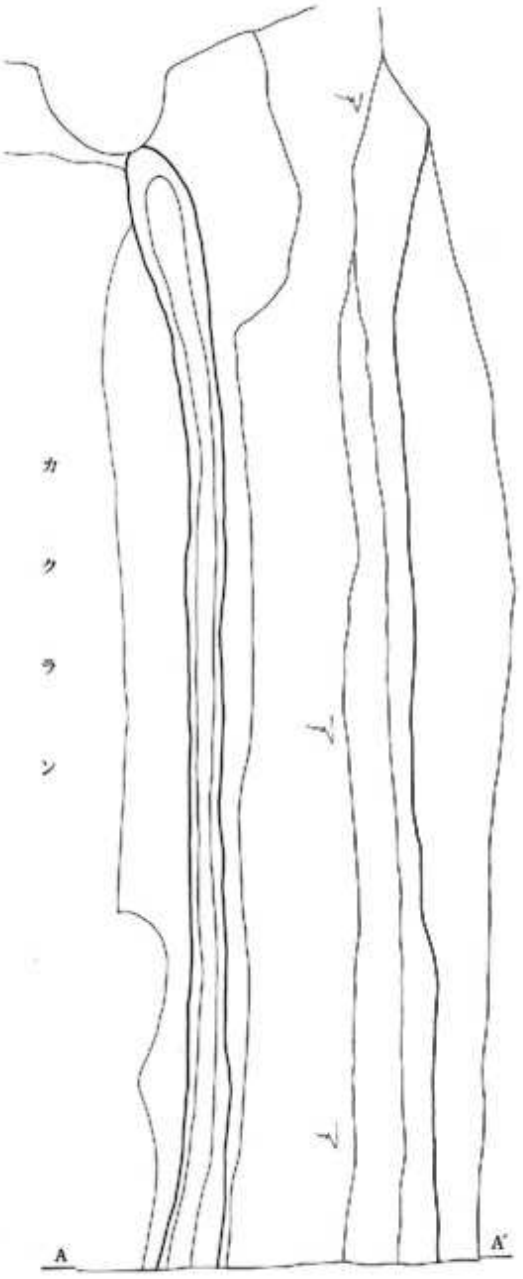
M2　土層説明
1層　黒褐色土(10YR2/2) ローム流を少量含む

M１号溝状遺構



M1　土層説明
1層　黒褐色土(10YR2/3)　後世のの攪乱層。
2層　黒褐色土(10YR2/2)　溝埋土。ローム粒を多く含む。時が多量に混入する。
3層　暗褐色土(10YR3/3)　地山ロームブロックを多量混入
4層　にぶい赤褐色土(7.5YR4/4)　ローム混入。砂質土。
5層　暗褐色土(10YR3/4)　軽石・ロームブロックを多く含む。
6層　にぶい赤褐色土(10YR4/3)　粘性強い。
7層　にぶい赤褐色土(7.5YR5/4)　地山漸移層。
8層　褐色土(10YR4/6)　砂質層。軽石を少量含む。

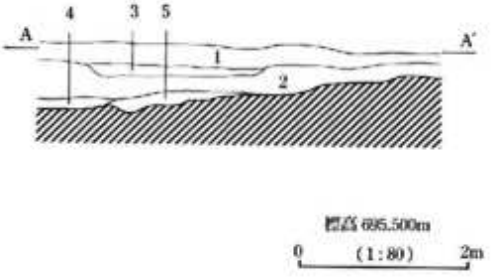
第６図　M１・２号溝状遺構全体図



調査風景(北より)

M3　土層説明

1層　黒褐色土(10YR2/3)　耕作土。
2層　黒褐色土(10YR3/2)　後世の攪乱層。
3層　明褐色土(7.5YR5/6)　後世の攪乱層。
4層　黒褐色土(10YR2/2)　攪乱層。地山ローム粒を多量に含む。
5層　黒褐色土(10YR2/2)　パミス・ローム粒を少量含む。粘性強い。



第6図　M3号溝状遺構全体図

2．ピット

今回の調査で確認されたピットは合計で7基を数える。いずれも西側の調査区より確認されたものである。ピット覆土中から遺物は確認されず、いつの時代の遺構であるか判断する事はできない。規模等の詳細は第2表ピット一覧表に示した。

3．出土遺物

出土遺物のうち、図化できた18点について実測図を示した。

M１号溝状遺構から出土した遺物についてはまとまって出土したため14点の遺物が図化可能であった。出土遺物はいずれも弥生時代後期の所産のものと考えられる。M１－１は大型の壺の頸部から口縁付近にかけての部分で、表面は赤色塗彩が施され、頸部には波状文が施される。この遺物は破片の状態で１箇所にまとまって出土した。２～６は小型の甕。２・３は特に完形の状態を保っている。２～４については外面上部に櫛描波状文、下部には縦方向のミガキが施され、５はさらに頸部に櫛描簾状文が認められる。６は胴部下半分のみの出土で残存する部分の上部に櫛描羽状文がわずかに認められる。７～12は高坏で、７は特に完形品である。８と10は坏部のみ、９・11・12は脚部のみの出土。いずれも外面には赤色塗彩が施され、脚部の内面はヘラナデによって調整されている。10の坏部口縁には突起状の装飾が認められた。13は蓋。天井部のみの出土である。

M２号溝状遺構からは土製紡錘車が出土した。最大径9.6㎝、重量は250ｇと言う大型な物で、盟上中より完形で発見された。紡錘車は糸を紡ぐ際に糸を巻き付ける棒を回転させるための一種のおもりであるのだが、細かな繊維を扱う物としてこれほどの重量の物を必要とするのか疑問を感じる。その形状よりここでは紡錘車としたが、例えば火おこしに使う火錐杵のはずみ車など、紡錘以外の用途に使われた可能性も考えられる。

M３号溝状遺構より図化できた遺物は４点である。M３－１は赤色塗彩を施した壺の胴部下半分。内面の摩耗が激しく、胴部の欠損部分も比較的同じ高さから欠損していることから、現在残存している状態で捏ね鉢の様な用途に使用した物であるかもしれない。M３－２～４は鉢である。２・３は無彩、４は赤色塗彩が施される。２は外面にハケメの調整痕が残り、その上から荒くミガキが施されている。３は内外面ともに表面の摩耗が激しい。４は赤色塗彩が施され、口縁部に１対の孔が確認される。M２とM３の出土遺物は、特に２つの遺構が接する付近での遺物の出土が顕著であり、両者は破片同士で接合するケースもあった。従ってそれらの遺物は同時期に廃棄された遺物であると考えられる。

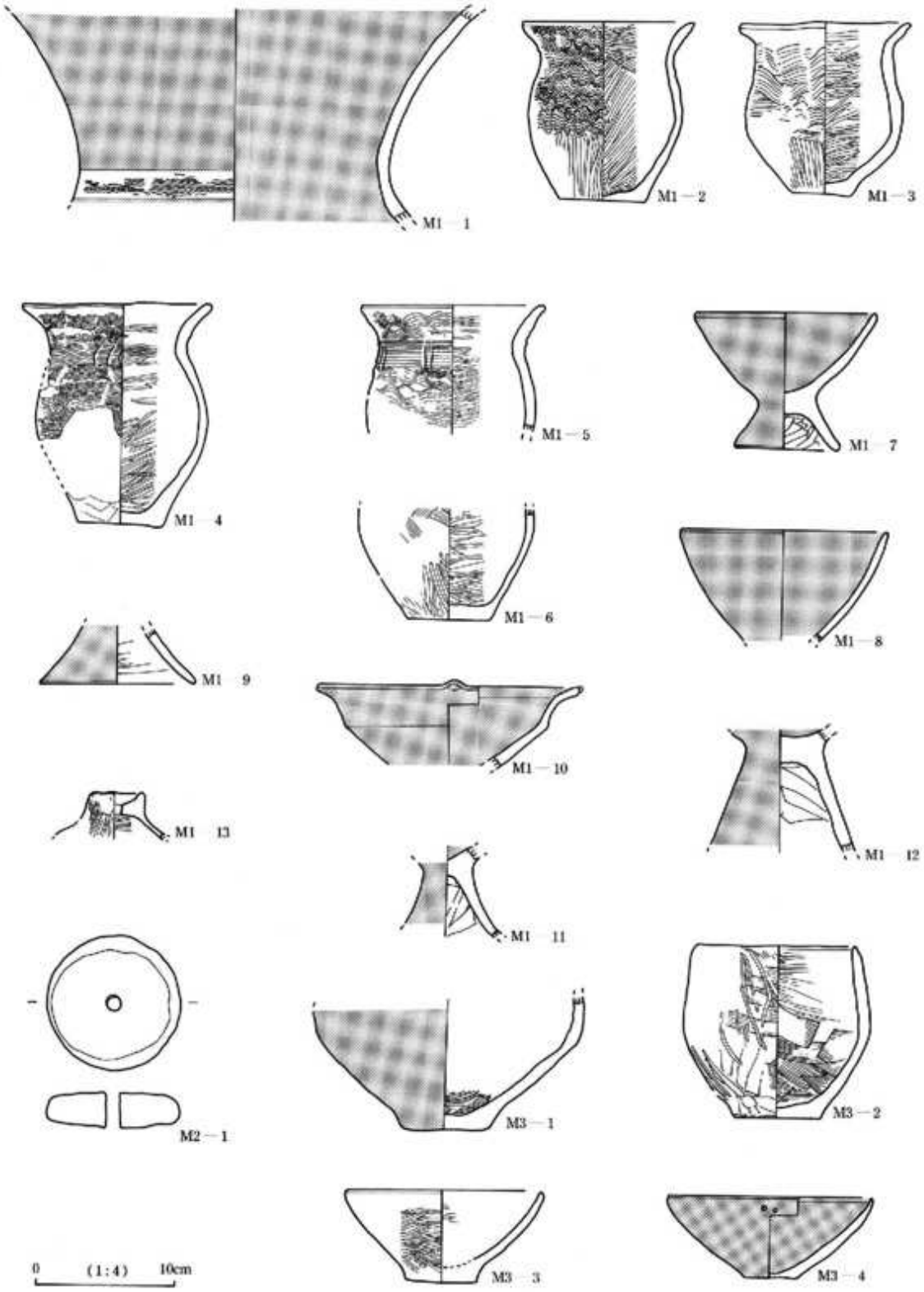
No.	器種	器形	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・文様	備考
M1- 1	弥生土器	壺	－	－	(15.2)	内外面赤色塗彩・頸部櫛描波状文	頸部のみ残存
M1- 2	弥生土器	甕	12.2	6.4	12.9	外面口縁～胴部櫛描波状文・胴部下方縦ミガキ・内面ミガキ	完形
M1- 3	弥生土器	甕	12.0	4.1	12.2	外面口縁～胴部櫛描波状文・胴部下方縦ミガキ・内面ミガキ	完形
M1- 4	弥生土器	甕	13.5	6.0	15.8	外面口縁～胴部櫛描波状文・胴部下方縦ミガキ・内面ミガキ	胴部 1/3 欠損
M1- 5	弥生土器	甕	13.0	－	(9.2)	外面口縁～胴部櫛描波状文・頸部櫛描簾縄文・内面ミガキ	上部のみ残存
M1- 6	弥生土器	甕	－	6.0	(8.1)	外面縦ミガキ・上方に櫛描羽状文・内面ミガキ	下部のみ残存
M1- 7	弥生土器	高坏	12.8	7.5	9.8	内外面赤色塗彩・脚部内面のみヘラナデ	坏部一部欠損
M1- 8	弥生土器	高坏	14.6	－	(8.0)	内外面赤色塗彩・脚部内面のみヘラナデ	坏部の一部残存
M1- 9	弥生土器	高坏	－	11.0	(4.1)	外面赤色塗彩・内面ヘラナデ	脚部の一部残存
M1-10	弥生土器	高坏	18.7	－	(6.2)	内外面赤色塗彩・口縁４方所に突起状の装飾	坏部のみ残存
M1-11	弥生土器	高坏	－	－	(6.5)	内外面赤色塗彩・脚部内面のみヘラナデ	脚部の一部残存
M1-12	弥生土器	高坏	－	－	(8.8)	内外面赤色塗彩・脚部内面のみヘラナデ	脚部の一部残存
M1-13	弥生土器	蓋	3.7	－	(3.4)	中央に穿 8mm の孔・内外面ヘラナデ	天井部の破片
M3- 1	弥生土器	壺	－	6.2	(9.5)	外面赤色塗彩・内面底部付近にハケメ・表面の摩耗激しい	底～胴部残存
M3- 2	弥生土器	鉢	11.7	6.4	12.4	外面ハケナデ・底部付近ヘラナデ→ミガキ・内面ハケナデ	1/2 残存
M3- 3	弥生土器	鉢	14.1	5.2	6.6	内外面ミガキ・内面の摩耗激しい	一部欠損
M3- 4	弥生土器	鉢	14.8	3.7	5.9	内外面赤色塗彩・口縁部に 2mm 径の孔１対	一部欠損

No.	器種	法量(cm・g) 最大径	最大厚	孔径	重量	所見	備考
M2- 1	土製紡錘車	9.6	2.5	1.1	250	内外面ヘラナデ	完形

第１表　出土遺物一覧表

No.	法量(cm) 長径	短径	深さ	形態	覆土	重複関係	No.	法量(cm) 長径	短径	深さ	形態	覆土	重複関係
P1	44	－	39	円形	黒褐色土(10YR/2/2)		P5	99	47	10	楕円形	黒褐色土(10YR/2/2)	P6 を切る
P2	49	－	14	円形	黒褐色土(10YR/2/3)	―部調査範囲外	P6	44	－	17	円形	黒褐色土(10YR/2/3)	P5 を切られる
P3	40	－	30	円形	黒褐色土(10YR/2/3)		P7	40	－	32	円形	黒褐色土(10YR/2/3)	―部調査範囲外
P4	52	－	14	円形	黒褐色土(10YR/2/2)								

第２表　ピット一覧表

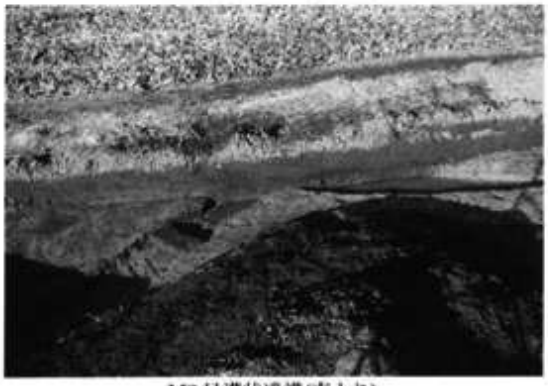


第8図　北一本柳遺跡Ⅳ　出土遺物実測図

写真図版一

M3 号溝状遺構(西より)

M3 号溝状遺構(西より)



M2 号溝状遺構(南より)

M2 ・ M3 号溝状遺構接合部分(西より)

M1 号溝状遺構(南より)

M1 号溝状遺構(西より))

▶西側調査区
ピット
(北より)

写真図版二

M1—1

M1—2

M1—3

M1—4

M1—5

M1—7

M1—6

M1—8

M1—9

M1—10

M1—12

M1—13

M1—11

M2—1

M3—1

M3—2

M3—3

M3—4

報 告 書 抄 録

書名	岩村田遺跡群　北一本柳遺跡Ⅳ
ふりがな	いわむらだいせきぐん　きたいっぽんやなぎいせきよん
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第158集
編著者名	出澤　力
編集・発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	2008.3.31
郵便番号	385－0066
電話番号	0267－68－7321
住所	長野県佐久市志賀5953
遺跡名	岩村田遺跡群　北一本柳遺跡Ⅳ(IKPⅣ)
遺跡所在地	佐久市岩村田字北一本柳2007－1、2008－1、2008－2
遺跡番号	52
経度	138°28′16″
緯度	36°16′1″
調査期間	2007.12.3～2007.12.14(現場) 2007.12.17～2008.3.31(整理)
調査面積	189㎡
調査原因	宅地造成
種別	集落址
主な時代	弥生時代
遺跡概要	遺構　溝状遺構3条(弥生時代)、ピット 遺物　弥生土器(壺・甕・鉢・高坏・器台・蓋)、土製紡錘車
特記事項	周辺に展開する弥生時代後期集落に伴う環濠と思われる溝状遺構を発見した。

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第158集
岩村田遺跡群　北一本柳遺跡Ⅳ

編集・発行　佐久市教育委員会
〒385-8501　長野県佐久市中込3056
文化財課
〒385-0006　長野県佐久市志賀5953
TEL 0267-68-7321
印刷所　株式会社ダンバラ印刷